言葉言葉言葉

岸田國士

――僕はあなた見たいな女が好きですよ。

――さう？　あたしも、あなた見たいな男が好き……。

――へえ、それぢや、入れ代つたらよかつたなあ。

かういふ間違ひは、そんなに稀ではない。

頭のてつぺんから――うしろから――額の生え際から声を出す人がある。

日本の役者は妙な処から声を出しますね。――旧劇

では頰のあたりから。新派劇では眼と眼の間から。そして、所謂新劇では、はてな、あれはと、耳の上からでしたね。たしか……。

公園のベンチに腰をかけてゐると、一匹の野良犬が、どこからかやつて来て、ベンチの脚に小便をひつかける。

犬は、してしまふと、僕の方をちらと横目で見て、あわてゝ眼をそらす。さうして、気まりが悪るさうに、向うへ行つてしまふ。

「おい、君、君……」

僕はうつかり、さう呼びかけるところだつた。

批評家が、自ら他人に加へた批評を読み返して見て、常にそれが、恰も他人が自分に加へた批評であるかのやうな感銘を受ける時、その批評家は、みぢめである。

彼は、しまひに、本当のことが言へなくなるだらう。

僕もさういふ一人であるらしい。

「翻訳者の歓びは、発見者の歓びである」

僕がかういふのに対して、友の××は言ふ。「翻訳にも創造がある」と。そして附け加へる。「マラルメやヴアレリイを訳してゐれば、自分も詩を作らうなどといふ欲望は起らない」と。

僕がこの友を畏れ、且つ愛する所以である。

親戚の青年が一人、僕のところにやつて来る――月に一度乃至二度。

彼は、来た時にはたゞ頭を下げる。それから帰る時、

「もう帰ります」と云ふまで、黙り続けてゐる――二時間でも三時間でも、時とすると半日。

僕は仕事の手を休めて彼の顔を見てゐる。といふよりも彼が今、何を考へてゐるかを知らうと努める。……彼は何も考へてはゐない。たゞ、悩ましげに、「自己の存在」を見つめてゐるのだ。

彼は僕と話をしに来るのではない。彼には、黙つて彼の前にすわつてゐる人間が必要なのかも知れない。

誰にでもさういふ時がある。

庭にコスモスを植ゑさせた。少し時期が遅いかも知れないといふことであつた。旱（ひでり）が続いた。朝晩、丹念に水をやつた。萎れかけてゐた葉が、茎が、活き〳〵と伸び上つた。立派についた。

「なあに、コスモスなら、ほうつといてもつきますよ」

今になつて、人が、かう云つたとする。

あなたは、水をやつたことを後悔しますか。ほんたうに後悔しますか。

十六になる妹は波を怖（こ）わがらない。二十になる姉は

怖わがる。

五つぐらゐの男の児は、波が寄せて来る毎に泣いた。三十を余計は越してゐないと思はれる、その母親らしい女は、子供をあやしながら、波に背を打たせてゐる。

髪白の老婆が、黒い日傘の下から、「あぶないよ、お前」と叫んだ。

あまり虫が多いので、窓に葭簾（よしず）の戸をはめさせた。

さうすると、一匹の蠅が、十匹の蛾よりもうるさくなつた。

女どもにも、たまには良い空気を吸はせてやらう——かう思つて……。

海岸の宿屋に来てから、彼女らは盛に食ふ。——ほんとに、いゝのか知らと思ふほど食ふ。

「やつぱり、からだの具合が違つて来るんだね、薬なんだね……そんなに腹がへるのは」かういふと——

「それや……自分でお勝手をしないだけでもね」

「非常に佳い」甲の友は云ふ。
「どうも下らない」乙の友は云ふ。
その中間を取つて、「まぁ相当なものだらう」と思ふのが人情なら、その人情は、また「鬼に呉れ」てしまへ。

底本：「岸田國士全集19」岩波書店
　　１９８９（平成元）年12月8日発行
底本の親本：「言葉言葉言葉」改造社
　　１９２６（大正15）年6月20日発行
初出：「文芸春秋　第二年第八号」
　　１９２４（大正13）年9月1日発行
入力：tatsuki
校正：Juki
２００５年11月23日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。